

瀬戸内における

水環境を基調とする海文化

瀬戸内の石の文化・塩の文化

平成 29 年 9 月

公益社団法人瀬戸内海環境保全協会



瀬戸内における水環境を基調とする海文化  
(瀬戸内の石の文化・塩の文化編)

目 次

瀬戸内における石の文化	頁
1. 瀬戸内海における石の歴史 .....	1
2. 瀬戸内海の主な石の産地 .....	6
3. 瀬戸内海の主な石の史跡 .....	11
瀬戸内における塩の文化	
1. はじめに .....	31
2. 製塩法の歴史と文化 .....	31
3. 瀬戸内海の主な塩の産地 .....	35
4. 瀬戸内地方の塩業と流通、食文化 .....	38
5. 瀬戸内海の塩に係る名所・史跡 .....	41
6. 瀬戸内海の塩に係る資料館など .....	47
7. 瀬戸内海の塩に係る行事 .....	50



## 瀬戸内における石の文化



## 瀬戸内における石の文化

### 1. 瀬戸内海における石の歴史

瀬戸内海の地形的な特徴は、瀬戸内海は本州、四国、九州に囲まれた水深の浅い閉鎖性の海域で、豊後水道、紀伊水道、関門海峡を通じて外洋と接していることである。

地質的には、瀬戸内海沿岸部や島は、白亜紀から古第三紀の花崗岩類（下図の桃色部）で構成されている。四国の中央構造線の南北で著しい違いが見られ、瀬戸内側に花崗岩が多く、その浸食によって多量の砂が生みだされ、白砂青松のもとになった。四国の花崗岩が分布している地域の南側には、白亜紀後期の堆積岩からなる和泉層群や結晶片岩からなる三波川変成岩類が分布している。また、山口県、香川県、愛媛県の一部に瀬戸内火山岩類が、九州には阿蘇山、九重山等の第四紀の火山もある。図1に瀬戸内海地域の地質図を示した。

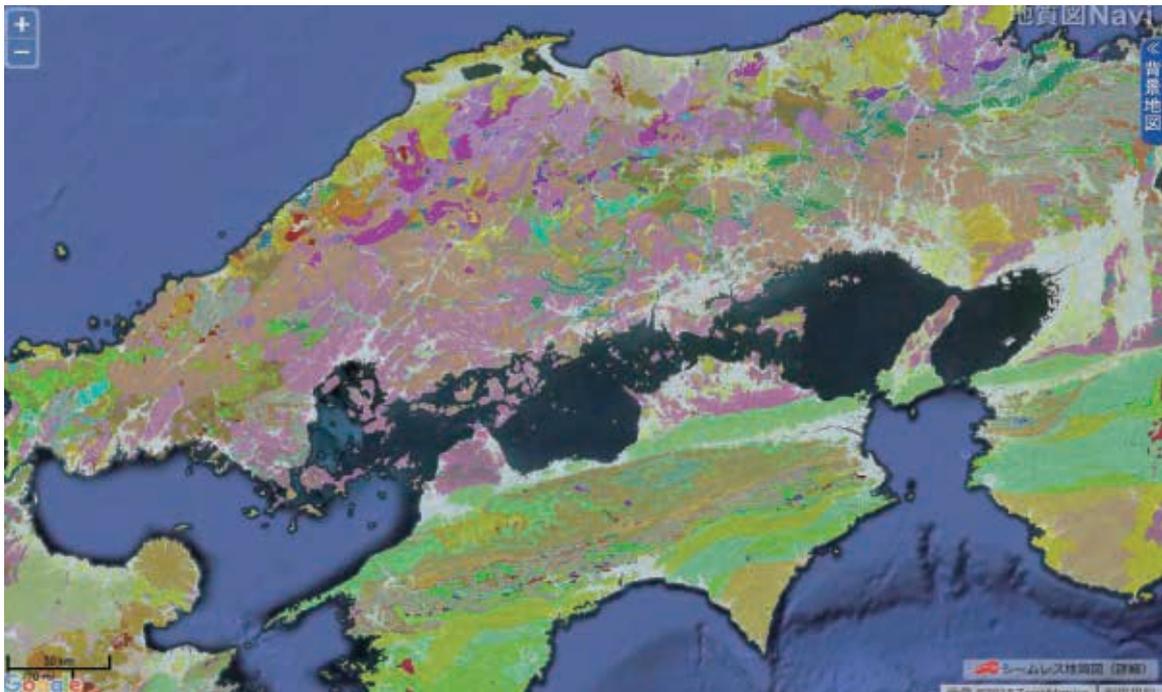


図1 瀬戸内海の地質図（出典：産総研シームレス地質図）

### （石材利用の変遷）

#### 旧石器時代～弥生時代

瀬戸内海における人類の活動は、旧石器時代にさかのぼるとされており、その時代から瀬戸内海で産する石が使われていた。瀬戸内海で産出する石器（刃物）として利用された石材としては、黒曜石（大分県姫島）、サヌカイト（香川県五色台・金山、兵庫県岩屋、奈良県二上山）で、サヌカイトは旧石器から弥生時代にかけて、黒曜石は縄文時代を中心に利用された。瀬戸内海各地の旧石器から弥生時代の遺跡から、黒曜石、サヌカイトが出土していることから、石を通じての交流があったことをうかがわせる。



黒曜石



サヌカイト

### 古墳時代

古墳時代になると加工が容易な軟質石材凝灰岩が主に使われ、石灰石や砂岩も一時期利用された。豪族が権威の象徴として古墳をつくり、石室内に死体を入れる棺を納めた。棺は木製のほかは凝灰岩製で、産地も限られていた。香川県の高松市国分町の「鷲の山石」とさぬき市の「火山石」は古墳時代前期後半、九州の阿蘇山の「阿蘇石」は前期後半から中期に利用された。石材は船で運ばれ、瀬戸内の航海に関わった有力首長の墓に使われたという。有明海沿岸の宇土半島の凝灰岩は中期末から後期に、近畿地方まで運ばれ利用された。兵庫県の「竜山石」は中期の畿内の巨大古墳や西瀬戸内海の山口県まで運ばれて利用された。その他大阪府・奈良県境の二上山石等が使用された。



石棺（大阪府立近つ飛鳥博物館）

### 飛鳥時代～平安時代

飛鳥時代に仏教が渡来すると、石造部の工人たちは仏教関係の石造物をつくるようになる。すでに奈良県の石棺の一部分に六弁の蓮華文を浮き彫りにしていたのである。飛鳥時代以降、飛鳥寺の塔の中心礎石や法隆寺金銅の基壇などは、石を加工してつくられた。

7世紀後期には朝鮮半島における百濟滅亡の時期から、唐、新羅軍が日本に攻めてくることを想定し、百濟の技術者により朝鮮式山城が築かれ、日本初の城の石垣が誕生した。

奈良時代になると奈良県を中心とした畿内に、仏教関係の石造物として石塔・石仏・石燈籠などがつくられた。花崗岩製の石造物がまざるのは、渡来人のなかに硬質石材を加工できる人がいたのである。

平安時代は密教が盛んになり、その影響をうけて宝塔・多宝塔・五輪塔などが造られた。さらに鳥居や磨崖仏なども造られ、奈良を中心とした畿内から全国に石造文化は広がっていった。瀬戸内地方では、大分県は臼杵磨崖仏と同所中尾五輪塔、岡山県は真鍋島の宝塔などがありいずれも凝灰岩製である。



真鍋島の宝塔  
(笠岡市商工観光課提供)

### 中世（鎌倉時代～安土桃山時代）

日本の石材加工の転換期は、中世初期に硬質の花崗岩の加工が容易になったことである。一挙に花崗岩の石仏や石塔類が全国に広がり、数量も増えた。花崗岩の加工技術は東大寺再建のために中国から新しい技術を導入したことが契機になっている。新しい技術は畿内から、良質な花崗岩が多い瀬戸内地方にも広がった。初期の石塔などには石工銘を彫っているのが、良質の花崗岩をもとめて瀬戸内地方に出張してつくったと考えられる。たとえば「念心」は、三原市の米山寺と大三島の大山祇神社の宝篋印塔、三原市佐木島の割石地藏磨崖仏に石工として登場する。いずれも優品ばかりで、大和を中心に活躍していて、出張してきた石工と考えられる



米山寺の宝篋印塔  
(印南氏提供)

中世は武家の時代で、豪族は氏寺に供養のため石塔を好んで建立した。瀬戸内地方では、中世に新しく登場した宝篋印塔が数多く建立された。瀬戸内地方は、中世を通じて石仏・石塔の花崗岩文化が継承され、近世の墓碑や社寺への奉納物などにつながっていった。

鎌倉時代に元寇の襲来に備え、幕府が博多湾沿岸に「石築地（いしつじ）」と呼ばれる石垣堤防を作らせた。本格的に城郭造りのための石積技術が発達したのは中世末の安土桃山時代以降で、織田信長が滋賀県にいた石工職人の穴太衆（あのうしゅう）に安土城を作らせたことから支配地に石垣作りの城が作られ始めた。豊臣秀吉が築城し徳川家康が再興した大坂城の石垣が日本最大のものとされている。また、西日本の城に石垣が備わっているのに比べて、東日本の城には小規模の石垣が見られるに過ぎない。この石垣に用いられた石材は、瀬戸内海沿岸地域で産出する花崗岩でできており、固くて丈夫なので、城の土台としての石垣に最適であった。



現在の大阪城石垣

### 近世（江戸時代）

城郭造りの石積技術は、江戸時代の塩田や棚田、波止、雁木、石橋、石風呂などに継承された。入浜塩田を波からまもる堤防は丈夫でなければならず、瀬戸内地方の花崗岩と石積み石工が活躍した。

硬質石材の加工技術が発達して広く利用されると、軟質石材の砂岩は安価な石塔や狛犬、凝灰岩は移動式の竈、流しなどの生活用具として近代まで利用された。



凝灰岩製の船上竈  
(印南氏提供)

## 明治時代～

近代における瀬戸内海で産出する石材の利用は、建築資材（国会議事堂、日本銀行本店、関西国際空港、燈台等）や墓石等としての利用が多くなるとともに、戦後の高度経済成長期には瀬戸内海各地で埋め立て工事や空港等の大規模建設工事が進められ、瀬戸内海各地の石材も大量に使用されてきた。



現在の国会議事堂

## (石の運搬の歴史)

古い時代に大きくて重い石材を、どのように運んだのだろうか。縄文時代から刳（くり）船の造船技術はあったが、弥生時代後期に鉄器を使い始めて造船技術はさらに進歩する。それまでの単材の刳船から、2材以上をつないだ複材の刳船ができる。古墳時代には両舷に棚板をつけた、構造船に近い大きな船もつくられていた。

古墳時代の石棺の輸送についてはいろいろな考え方があった。2艘の船を平行に等間隔にあけて並べ、丸太2本を船の前後に渡す。2本の丸太に綱で石をつり下げて運んだというのが一番納得できる方法である。石を海面下に沈めることで少しでも浮力をつけて、船にかかる重量を減らしたのであろう。

陸上では巨岩や巨木を運ぶ「修羅」・「股橈」などにより運ばれた。



修羅  
(出典：絵引民具の事典)

中近世の石材運搬法については、どんな船が、どのようにして運んだのかわかっていない。日本は海洋大国でありながら、和船の資料がほとんど残っておらず、研究者も少なかった。石材の輸送は重い石を運ぶため、船がいたみやすく、船体構造にも工夫があったはずである。

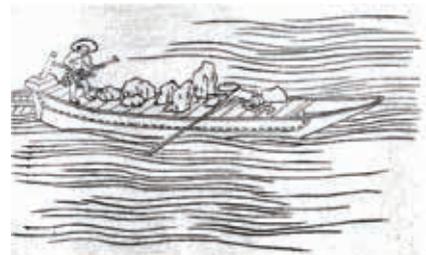
近世中頃に出版された『和漢船用集』は、和船資料が少ない近世の唯一の船の百科全書といえる。全12巻で、各巻ごとにテーマが違っている。「石船」は第4巻と第5巻に、解説と図が掲載されている。

第4巻は、和漢の海船を紹介した巻である。中国の明代の『武備志』に、石を運ぶ船を「山船」とよぶと紹介している。日本では地名でよび播州の御影の石船は御影船、紀州では紀州石船とよんだ。また、石船の形は地域で違っていた。図では、石を積んだ石船を、大型の櫓を2人一緒にこいでいる。



海船の石船 (出典：和漢船用集)

第5巻は、江湖川船を紹介した巻である。摂州で石を運ぶ川船は、団兵衛とよんだ。ただし団兵衛は、石を積む船だけとは限らなかった。石船は船側（船縁）の上に板を並べて釘付けしていた。その板の上に石をのせて石を運搬した。図では、石を積んだ船に2人の船頭が前後にわかれて乗っている。艫（後方）の船頭は片手で舵、片手で櫂をもって操船し、舳（前方）の船頭は竿をさして船をすすめている。



江湖川船の石船 (出典：和漢船用集)

近代、特に戦後は高度経済成長期には瀬戸内海各地での埋め立て工事等で浅瀬に石を投入する木造の石運搬船が、更には空港等の大規模建設工事で大量の石を運搬するためガット船（クラブ付自航式運搬船）が作られた。瀬戸内海には、広島県似島（いのしま）、兵庫県家島（いえしま）にガット船の基地が作られている。その他、陸上交通網（高速道路等）の整備が進み、陸路でも石材が大量に輸送されるようになった。



ガット船の停泊地（兵庫県家島）



木造の石運搬船（撮影：脇山功氏）

このように、瀬戸内海は石の産地として古くから人の営みに深く係るとともに、石の流通経路として大きな役目をはたしてきた。

## 2. 瀬戸内海の主な石の産地

名 称	特 徴
御影石 (みかげいし) (兵庫県神戸市)	<p>兵庫県六甲山南麓、神戸市東灘区御影地方で採石される花崗岩の石材を御影石と呼んだのが始まりで、それが花崗岩や花崗岩の石材の通称となった。特に御影地方のものは、本御影とよばれ区別されている。本御影は中粒の黒雲母花崗岩で、肉紅色のカリ長石を含むため肉紅色を呈し、御影石の中でもっとも美しいとされる。</p> <p>(参考：日本大百科全書)</p>
竜山石 (たつやまいし) (兵庫県高砂市)	<p>兵庫県高砂市竜山にある岩山で、相生層群の流紋岩質塊状凝灰岩によりできている。竜山石は適度な硬さと粘りがあり加工に向いていることから、古墳時代に石棺の石材として切り出されてから、約 1700 年にわたって採石されている。また、この竜山石の岩盤を掘りこんだ巨石遺構が「石の宝殿」である。「石の宝殿」は横口式石槨を作ろうとしたが未完成のまま放置されたものであろうという説が有力である。12 世紀の文献には、生石 (おうしこ) 神社の御神体として祀られているという記述があり、宮崎県天の逆鉾などとともに、日本三奇とされている。平成 26 年に国の史跡に指定された。</p> <p>(参考：ひょうごの地形・地質・自然景観 神戸新聞総合出版センター発行)</p>
<p>和泉砂岩 (いずみさがん)</p> <p>・和泉石 (いずみいし) (大阪府阪南市、泉南市)</p> <p>・撫養石 (むやいし) (徳島県鳴門市)</p>	<p>西南日本を縦断する中央構造線に並行して、和泉山脈から阿讃山脈の一带で分布する白亜紀後期の和泉層群は、良質の砂岩が産出することで知られる。このうち、和泉山脈で産するものは「和泉石(いずみいし)」、阿讃山脈のものは「撫養石(むやいし)」と呼ばれる。</p> <p>和泉石は、近世以降、和歌山城や岸和田城をはじめ、泉南地域の民家や田畑の石垣にも多く使用されたほか、「泉州石工」の手により狛犬・石灯籠などが作られ、瀬戸内海各地の神社に多く奉納された。また高い技術をもつ泉州出身の石工集団は、瀬戸内海の花崗岩産出地域にも多く進出し、各地で石材加工業の発展を担った。</p> <p>和歌山城の石垣</p>



名 称	特 徴
	<p>撫養石は、主に徳島県鳴門市(撫養)で産出し、古くは古墳時代の石室に使用され、その後、吉野川下流域を中心に神社の石像物や民家などの石垣にも多く使用された。また近世以降は、鳴門の塩田地帯を縦横に巡る水路堤敷の石垣として多用された。</p>  <p style="text-align: center;">塩田水路の石垣</p>
<p>白川石(しらかわいし) (京都府京都市)</p>	<p>京都市の比叡山から大文字山付近に露頭する黒雲母花崗岩。平安時代から石塔等に利用され、安土桃山時代には伏見城や大坂城、方広寺等の石切場となっている。また、白川石が風化した白川砂は神社や庭園の白砂として広く用いられている。</p>
<p>庵治石(あじいし) (香川県高松市)</p>	<p>庵治石とは、細粒黒雲母花崗岩という石英、長石を主成分とし少量の黒雲母と角閃石を含む石のことで、八栗五剣山の西麓で採石されている。江戸時代には高松藩の御用丁場になったといわれており、主に墓石、灯籠、石彫などに利用されている。 (参考：高松市牟礼庵治商工会 HP)</p>
<p>サヌカイト (香川県)</p>	<p>サヌカイトは、瀬戸内海火山岩類に属し、天然ガラスを多く含み、非常に緻密な古銅輝石安山岩である。エッジ状に割れやすく、断片のエッジは鋭く切れ味が良いため、旧石器時代から弥生時代にかけて石器として利用された。尖頭器、ナイフ形石器、スクレーパなどの石器に利用されてきた。主に香川県(五色台、金山、城山など)で産出することから、ドイツの学者ワインシエンクにより「サヌカイト」と命名された。 サヌカイトは、固いもので叩くと高く澄んだ音がするので、カンカン石とも呼ばれ、楽器としても利用されている。</p> 
<p>サヌカイト (二上山：大阪府・奈良県の県境)</p>	<p>二上山(にじょうざん)は金剛山地の北部に位置する山で、石器として使用されたサヌカイト(安山岩)の産地である。二上山麓には、旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡が数多く発見されており、二上山北麓遺跡群と呼ばれている。</p>
<p>豊島石(てしまいし) (香川県土庄町)</p>	<p>豊島石は、角礫凝灰岩と言われる加工しやすい石であるため、鎌倉時代から採掘され、灯籠用原石として全国各地で用いられてきた。石灯籠としては、京都の桂離宮や二条城、大阪の住吉神社のものが有名である。水に弱く風化しやすい欠点があるが、熱に強く1350度から1450度くらい耐えられるため、現在では茶室の炉などに使われている。壇山(檀山)の頂上近くに、明治42年(1909年)から採掘されていた大丁場があるが、現在は閉鎖されている。</p>

名 称	特 徴
議院石（ぎいんせき） （広島県倉橋島、山口県黒髪島）	議院石は広島県呉市沖合にある倉橋島、山口県周南市沖合の黒髪島から産出される花崗岩であり、国会議事堂や議院会館に使用されたことから、この名前がある。主に、墓石や建築物に利用されている。 （参考：歴史ある石材の島の交流会、中国経済産業局作成のリーフレット）
北木石（きたぎいし） （岡山県笠岡市）	北木石は、岡山県笠岡市、笠岡諸島の北木島で産出される花崗岩である。明治時代以降、日本銀行本店本館、靖国神社鳥居、明治生命館、東京駅丸の内駅舎等多数の歴史的建造物に用いられている。現代では主に墓石、建築材として利用されている。
赤間硯（あかますずり） （山口県宇部市、下関市）	<p>赤紫色を基調とする山口県特産の赤間硯は、国の伝統的工芸品に認定されており、その名称は、古くから赤間関（あかまがせき：現在の下関市の旧市街）で制作されてきたことによる。現在は、宇部市の山で採石されており、宇部市や下関市の職人の手で硯に加工され、赤間硯の歴史を現代に伝えている。赤間硯の原石は質が硬く緻密なため吸水率も低く、粘りがあるため細工がしやすく、硯石として優れた条件を持っている。また、むらなく*鋒鋦があり密立しているので、磨墨、発墨も良く、のびの良い墨汁を得ることができる。硯の形は数多くあり、自然のままにとどめたものから、種々の彫刻を施した優美なものまである。角硯や丸硯などは端正な美しさと重量感のある実用を兼ねた愛好品、野面硯は原石の形を活かした大胆な造形と自然美に趣があり、彫刻は簡素なものから精緻なものまで幅広く、伝統的な形式を守りながら伝承されてきた技巧をあますことなく表現し、時代の特徴や傾向を如実に示している。</p> <p>歴史的には、17世紀初頭、毛利輝元の遺品として「天下一」「赤間関住（じゅう）大森土佐守頼澁（とさのかみよりずみ）」と銘の刻まれた赤間硯が防府市の毛利博物館に所蔵されており、江戸時代に萩藩から朝鮮通信使への贈答品として度々使われた記録がある。オランダのライデン国立民俗学博物館には、「akama ishi」の名称で19世紀初期にシーボルトコレクションとして収集された赤間硯が所蔵されている。</p> <p>*「鋒鋦」（ほうぼう）：石英などの小さな結晶で、墨をする際におろし金のような役割をするもの。</p>
大島石（おおしまいし） （愛媛県今治市）	大島石は、愛媛県今治市大島で、700年前から採石されている花崗岩で、石目、岩肌が美しく風化しにくいという特徴がある。青御影石として、宝篋印塔、墓石、建築物（国会議事堂、赤坂離宮、奈良帝室博物館等）などに利用されている。（参照：今治市HP）



名 称	特 徴
<p>伊予・阿波青石 (あおいし) (愛媛県西条市、徳島県)</p>	<p>四国の名石として、深緑色で独特の縞模様をした青石（玄武岩が変成を受けてできた緑色片岩）があるが、瀬戸内海では、愛媛県、徳島県の三波川変成帯の地域から産出することから、伊予青石や阿波青石と呼ばれている。主に、庭石、沓脱石、彫刻の台座などに利用されている。</p> 
<p>エジル石閃長岩(えじるせきせんちょうがん) (愛媛県岩城島)</p>	<p>エジル石閃長岩は、瀬戸内海のほぼ中央に浮かぶ愛媛県岩城島で産出する岩石で、杉石や片山石などの新鉱物を含む特異な石として愛媛県の天然記念物に指定されている。また、近年の研究で岩石中から、リチウムを多量に含む非常に珍しい新鉱物「村上石」が発見され注目を集めている。</p> 
<p>黒曜石(こくようせき) (大分県姫島)</p>	<p>火山活動に伴い流紋岩質マグマが高温高圧の状態から地上に噴出したり、地表近くに貫入し急冷した場合にできるといわれている。黒曜石は、黒色ないしは暗色の火山ガラスで、化学組成は流紋岩質、破断面は貝殻状になる。晶子や微晶を含み少量の班晶を含むことがある。</p> <p>姫島は、縄文から弥生時代にかけて西南日本に広く分布した黒曜石産地として有名である。通常の黒曜石は黒色であるが、姫島の黒曜石は乳白色を帯びたものもある。姫島の黒曜石の産地は、国の天然記念物に指定されている。</p> <p>(参照：姫島村 HP)</p> 



瀬戸内海における主な石の産地

### 3. 瀬戸内海の主な石の史跡

名 称	特 徴
石の宝殿及び竜山石採石遺跡 (兵庫県高砂市)	<p>生石神社の御神体は巨大な石造物で、裏手に切妻風の突起を後ろにして家を横たえたような形で横約 6.5m、高さ約 5.6m、奥行約 7.5m、重さ約 500t もある。これは「石の宝殿」と呼ばれ、奈良時代の「播磨国風土記」に「大石」と記されている。水面に浮かんでいるように見えるところから「浮石」ともいわれているが、多くの謎に包まれ、宮城県塩竈市御釜神社の「四口の神釜(よんくのしんかま)」、宮崎県高原町霧島東神社の「天之逆鉾(あまのさかほこ)」と並んで日本三奇の一つに数えられている。いつ、誰が、何のために作ったのか、不思議な石造物として訪れた人の目を驚かせている。</p> <p>また、竜山の山中には竜山石の採石場が点在する。竜山石とは今から約 9000 万年前に形成された凝灰岩で、古墳時代から現在まで約 1700 年間採石され続けており、高品質で加工に適した石材として様々な石造物の製作に使われてきた。特に、古墳時代の大王の棺や江戸時代の建築材などに利用されるなど、竜山石の製品は、西日本各地に流通し、石の文化を伝えてきた。</p> <p>江戸時代の天保 7 年(1836 年)に、姫路藩の命で景勝地として「観涛処」の三大字が崖面に掘られた。観涛処の上からは南方の海を見渡すことができる。</p> <p>平成 26 年(2014 年)10 月 6 日に、「石の宝殿及び竜山石採石遺跡(いしのほうでん および たつやまいしさいせきいせき)」として、国の史跡に一括指定された(参照:高砂市 HP)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>石の宝殿(生石神社のご神体)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>竜山石採石遺跡</p> </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;">  <p>景勝地「観涛処」</p> </div>

名 称	特 徴
<p>五色塚古墳 (兵庫県神戸市)</p>	<p>五色塚古墳は4世紀後半に築造された3段築造の前方後円墳で、墳丘の大きさは全長 194m、前方部の幅 82.4m、高さ 13m、後円部の直径 125.5m、高さ 18.8m で、周濠を巡らしている。下段の斜面には小さな石を葺き、中段及び上段の斜面には大きな石を葺いている。中段及び上段の葺石の多くは分析の結果、淡路島の東海岸から運ばれたものであった。下段の葺石は、主に地元の礫を用いている。使用された石の総数は、223万個、総重量 2,784 トンと推定される。この他埋葬施設に用いられたと推定される石材に、徳島県産と判定された板状の石材を用いている。明石海峡を見下ろす場所に立地しており、海上交通と関りの深い有力者の墓と考えられている。古墳域は、大正 10 年 (1921 年) に小壺古墳の古墳域と合わせて国の史跡に指定されている。</p> <p>(参照：神戸市教育委員会文化財課 HP)</p> 
<p>古代大輪田泊の石椋 (いわくら) (兵庫県神戸市)</p>	<p>大輪田泊と呼ばれた兵庫の港は、奈良時代に行基が築造したと伝えられ、遣唐使船の寄港地や平清盛による日宋貿易の拠点となった。この巨石は昭和 27 年 (1952 年) の新川運河の浚渫工事の際に発見され、平清盛が築いた経ヶ島の遺材ではないかと想像されていた。しかし平成 15 年 (2003 年)、この巨石が発見された場所から北西約 250m の場所で、奈良時代後半から平安時代中頃の港湾施設と推測している遺構と建物の一部が発見されたことから、この巨石は古代の石椋の石材であったと推定される。(参照：神戸市 HP)</p> <p>石椋：石を積み上げた防波堤や突堤の基礎等の港湾施設 経ヶ島：平安末期に清盛が風よけのため築いたとされる人工島</p> 

名 称	特 徴
<p>城山 (香川県坂出市)</p>	<p>城山には古代山城の遺跡があり、国指定の史跡となっている。また、城山の城跡は城山長者の伝説と結びついていて、坂出の昔話として語り伝えられている。</p> <p>城山は朝鮮式山城とも神籠石とも呼ばれているが、今日では朝鮮式山城に類似する構造の城跡と考えられている。朝鮮式山城は7世紀後半頃の朝鮮半島の政治的緊張に伴い、日本国内の防御体制を整えるために築かれた城である。</p> <p>このほか、山中にはホロソ石・マナイタ石と呼ばれる石製加工物が散在しているが、これらは城門の礎石ではないかと推測されている。ただし、ホロソ石一対とマナイタ石とで城門の礎石を組むと、その数が足りないことや、その発見場所が全く離れていたりすることなど不明な点が多く、破壊されたためではないかとか築造途中に放棄されたのではないかなど、諸説が考えられている。いまだ謎に包まれた遺跡である。</p> <p>(参照：坂出市 HP)</p> <div data-bbox="707 797 1267 1182" data-label="Image"> </div> <p>城山のホロソ石</p>
<p>大坂城残石記念公園 (香川県土庄町)</p>	<p>戦国時代の終わり、冬・夏の陣で落城した大坂城を修築するために切り出されたが、使われることなく放置された約40個の残石を中心に大坂城残石記念公園が整備されている。公園内には、小豆島における石丁場、残石などに関わる写真や古文書のほか、当時の石の運搬に使われた道具類や石工が使う用具類などが展示されている。また、当時の輸送方式などが分りやすく再現されているほか、石づくり体験などもできる。</p> <p>(参照：小豆島観光協会 HP)</p> <div data-bbox="707 1585 1193 1906" data-label="Image"> </div> <p>大坂城残石記念公園</p>

名 称	特 徴
<p>池田の棧敷 (香川県小豆島町)</p>	<p>亀山八幡宮から 400m ほど西に離れた小高い丘に、石垣づくりの棧敷が築かれている。棧敷の規模は、長さは 80m、高さは約 18m、6～8 段の階段状になっている。石垣は、島内から安山岩、玄武岩、花崗岩などが集められ積み上げられたものである。</p> <p>瀬戸内海に面して、自然の地形を巧みに利用した、石を野面積(のづらつみ)にした棧敷の傑作で、秋祭りの際、太鼓台や御輿、大練りなどを見物するために築かれたのではとされている。構築年代についての資料は見当たらないが、『亀山八幡宮奉懸当社御祭礼之図』から文化 9 年(1812 年)以前ではないかと推定される。(参照：小豆島観光協会 HP)</p> 
<p>石の民俗資料館 (香川県高松市)</p>	<p>牟礼・庵治の 400 年にわたって築き上げられた石の文化と歴史。石の民俗資料館では石工達の知恵と技術、優れた技能を伝えてくれる。</p> <p>館内では、大正末期から昭和初期にかけての牟礼町における、石の切り出し、運搬、加工のそれぞれの風景を、等身大の人形を使ったジオラマでリアルに再現。また各工程で使用していた実物資料も約 1000 点展示しているが、これらの多くは陳列するだけでなく、実際に質感を感じてもらうため、手で触れることが可能となっている。</p> 
<p>女木島のオオテ (香川県高松市)</p>	<p>女木島(別名鬼ヶ島)の東浦集落の海岸線に築かれた讃岐岩類で築かれた防風防潮垣をオオテと呼んでいる。強風から家を守るために明治初期から昭和中期にかけて作られ、民家の石垣よりも高く(約 4m) 築かれていたが、高度経済成長以降、家の新築に伴い少しずつ景観が変わりつつある。</p> 

名 称	特 徴
佐田岬半島の石造物群 (愛媛県伊方町)	<p>佐田岬半島には、鎌倉時代中期から江戸時代にかけて、五輪塔・宝篋印塔・層塔などの石造物が1400点超確認されている。それらはすべて大分県、香川県、兵庫県などの地元以外の8種類の石材で、それぞれ各産地で作られ、瀬戸内海を通じて佐田岬半島に運ばれたものと考えられている。(参照：伊方町の石造物調査報告書Ⅱ)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
浄土寺山の切り出し岩 (広島県尾道市)	<p>尾道の繁栄は、嘉応元年(1169年)に備後国大田庄の年貢米積出港の公認港に定められてから始まり、江戸時代の寛文12年(1672年)に開かれた西廻り航路によって、尾道に北前船が寄港すると更に繁栄を極めた。北前船が、東北地方や北陸地方などの産物を運んできた後の、帰り荷として尾道の石材が積み込まれ、日本海沿岸に運ばれた。石材とともに尾道石工も各地に赴き、鳥居や灯籠をつくっていった。船底に石材を積むと船(千石船；北前船で使用されていた1000石以上の船)の安定にも一役買っていたという。石材の切り出し場としては、古くは市街地の背後、千光寺山や浄土寺山、対岸の向島であり、尾道は地質学的に花崗岩が多く、良質の石材にも恵まれていた。</p> <p>(参照：尾道商業会議所記念館第9回企画展示-尾道と石工-)</p> <div style="text-align: center;">  </div>

名 称	特 徴
鞆の浦の雁木・常夜燈 (広島県福山市)	<p>鞆港には、江戸期の港湾施設である常夜燈・波止（はと）・雁木（がなぎ）・焚場（たでば）・船番所跡の港湾施設 5 点セットが今も残っている。この 5 点セットが全て残っているのは全国でもここだけと言われている。</p> <p>雁木は、潮の干満に関らず船着けができる石階段のことであり、最上段には船を係留するための船繫石（ふなつなぎいし）が並んでいる。また、常夜燈は安政 6 年（1859 年）に西町の人たちの寄進により設置された灯台で、江戸時代に作られた石造り常夜燈としては日本最大級のものである。雁木、波止、常夜燈は御影石を活用して造られた港湾施設である。</p> <p>(参照：福山市 HP)</p> <div data-bbox="684 672 1262 1077" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">雁木</p> <div data-bbox="715 1167 1235 1503" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">波止</p> <div data-bbox="715 1563 1235 1928" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">常夜燈</p>

名 称	特 徴
<p>宮島・弥山 (広島県廿日市市)</p>	<p>宮島（厳島）の中央部にある標高 535 m の山で、古くからの信仰の対象になっている。天然記念物に指定されている「瀨山原始林」は、針葉樹林に南方系の植物が混在する森で、ヤマグルマなどの原始的な植物を自然の状態で見ることができる貴重な場所となっている。標高 400m 以上の所では、ツガやモミなどの針葉樹とアカガシやウラジロガシなどの常緑広葉樹が混じった混合林が見られる。中腹から麓にかけては、アカマツを主体にシリブカガシ・タイミンチバナ・ミミズバイなど常緑広葉樹が多い森になっている。多様な植物相をもつ自然の森の美しさと、巨岩奇石（曼荼羅岩、干満岩、風吹岩、賽の河原、岩屋大師竜穴等）が点在する変化に富んだ景観、そして眼下に広がる瀬戸内海の多島美を見ることができる。</p> <p>(参照：廿日市市 HP)</p>  <p style="text-align: center;">弥山山頂</p>
<p>石城山神籠石 (いわきさん こうごいし) (山口県光市)</p>	<p>瀬戸内海沿岸各地にある神籠石(古代山城)については、築造の歴史や目的がはっきりしておらず謎が多いことで知られている。</p> <p>光市石城山にある神籠石は、光市と田布施町にまたがる標高 362m の石城山県立自然公園の中にある。高日ヶ峰、大峰、星ヶ峰、鶴ヶ峰、月ヶ峰の 5 峰を主峰として、その八合目付近を、土塁や門、水門などの遺構が取り巻いており、昭和 10 年（1935 年）に国指定史跡となっている。また山頂付近には、重要文化財に指定されている石城神社本殿が鎮座している。</p> <p>(参照：光市 HP)</p>  <p style="text-align: center;">西水門</p>

名 称	特 徴
<p>二見夫婦岩 (山口県下関市)</p>	<p>二見夫婦岩は、山口県豊北と豊浦との境の、響灘を望む古くからの漁師町二見浦にある。</p> <p>国道の脇の海岸そばに立つ夫婦岩は、神聖な岩として信仰され、二つの岩をつなぐしめ縄は、毎年1月2日に締め込み姿の男衆の手によって張り替えられる。響灘に夕日が沈む頃、岩と海と太陽があいまって作り出す風景は神秘的でおごそかな気持ちにさせられる場所である。(参照：下関市 HP)</p> 
<p>久賀の石風呂 (山口県周防大島)</p>	<p>石風呂とは、石室の中で柴等を燃やして石を焼き、医療の目的で蒸気浴あるいは熱気浴を行うための施設である。</p> <p>久賀の石風呂は、石を積みあげた上に粘土を塗りこめ、内部の土間もたたきになっているもので、海水をかけた海藻を焼けた石室内に敷いて湯気をたてる方式で蒸気浴を行う。最大幅 5.4m、最大奥行 4.65m、高さ 2.55mの石積式蒸風呂で、西日本最古の石風呂といわれている。近隣の人々の湯治場として昭和初年まで利用されていた。</p> <p>言い伝えによると、1180年平重衡によって東大寺が焼失。後白河法皇の領土であった周防国から木材を調達するため、1186年俊乗房重源上人が任命され下った。用材は山口県徳地より切りだされたが、その間、この地に巡錫の折、石風呂を造ったといわれている。久賀の石風呂は西日本最大、最古のもので、昭和33年(1958年)文部省の文化財重要有形民俗資料に指定された。</p> <p>(参照：周防大島町 HP)</p> 
<p>下請川南遺跡の石鍋 (山口県宇部市)</p>	<p>下請川南遺跡は国内で2番目に発見された石鍋製造跡である。滑石をノミで削って作った石鍋は西日本の中世の遺跡からよく出土するが、下請川南遺跡ではその未成品や破損品が多数出土しており、ここで石から削り出す加工が行われていたと考えられる。</p> 

名 称	特 徴
住吉神社石造燈台 (山口県防府市)	<p>住吉神社は、萩藩の水軍の本拠地である御舟倉へ続く入川（いりかわ）の河口に、海上交通の安全を祈願するために、正徳5年(1715年)に創建された。</p> <p>石造燈台は、その境内に文久3年(1863年)に建立されたもので、基壇 389cm×384cm、高さ 727cm におよぶ灯籠（とうろう）型の燈台である。竿（さお）の部分にあたる石積みには、建立にたずさわった世話人や石工、拠出者などの銘が刻まれている。</p> <p>萩城に往来する表玄関の海上交通の安全に寄与してきた交通遺跡であり、史跡萩往還の関連遺跡として指定されている。 (参照：防府市 HP)</p> 
常山城跡 (岡山県岡山市・玉野市)	<p>玉野市と岡山市とにまたがる標高 307m の美しい山で、古く内海の護りとしての山城が築かれていたという。</p> <p>県下有数の山城で、天正3年（1575年）の児島常山合戦で、城主上野隆徳が毛利勢に対して孤軍奮戦し、妻鶴姫が女房 34人と共に敵陣に切り込んだ。この女軍奮戦は全国的にその例がなく、歴史物語にもとりあげられている。</p> <p>現在でも、合戦時に兵士千人が隠れたといわれる千人岩や、城主上野隆徳が岩の上で切腹したと言われる腹切岩、華々しく最期をとげた女軍が眠る 34 柱の石碑のほか、石畳の旧路、底無し井戸、総門付近の石垣、本丸の石垣や見張台などもほとんど残っている。（参照：玉野の文化財）</p>   <p style="text-align: center;">常山千人岩 <span style="margin-left: 200px;">女軍の墓</span></p>
御所ヶ谷神籠石 (福岡県行橋市)	<p>「神籠石（こうごいし）」とは山中に列石や土塁、石塁で城壁を作った遺跡のことで、現在北部九州に 10ヶ所、瀬戸内海沿いの地域に 6ヶ所確認されている。明治 31 年（1898 年）に久留米市高良山の高良大社を囲む列石が「神籠石」として紹介されて以来、各地の類似した列石のある遺跡も神籠石と呼ばれるようになった。神聖な土地を囲む「神域」説と「山城」説で論戦が続いたが、戦後に各地の神籠石で行われた発掘調査により、列石がもともとは土塁の基礎であったことが明らかになり、現在では「山城」説が有力となっている。神籠石は「日本書紀」などに記録がないため築かれた時期ははっきりしないが、7 世紀後半に築かれた記録がある朝鮮式山城の構造と共通していることから、これらと同じ時期に築かれたと考えられている。朝鮮式山城は史書に築城年などが記載されているもので、従来、神籠石と呼び分けられていたが、近年では一括して古代山城と総称することが多い。</p>

名 称	特 徴
	<p>7世紀後半は、朝鮮半島の三国のうち百済と高句麗が、新羅と中国の唐の連合に滅ぼされた時代である。660年に百済が唐軍に滅ぼされ、旧百済の遺臣と倭（古代の日本）が復興軍を起こした。しかし、復興軍は663年に白村江で唐と新羅の連合軍に大敗し、倭は唐と新羅の連合軍が日本列島に攻め込むことを恐れて九州に664年に防人（さきもり）を配置し、水城（みずき）を築き、さらに665年に「大野城」「基肄城」667年に「金田城」の3城が次々と築かれた。御所ヶ谷神籠石の発掘調査でもこの時期の壺が出土している。</p> <p>御所ヶ谷神籠石は、行橋市の南西、みやこ町との境となるホトギ山（御所ヶ岳）にある。下の写真は「中門」の石塁で、1300年以上の時を経てなお、高さ7mもの石積みが残っている。</p> <p>「御所ヶ谷」という地名は、九州を訪れた景行天皇（12代）がこの地に行宮（仮の皇居）を設けたとの言い伝えによる。遺跡のほぼ中央の見晴らしのいい高台に、景行天皇を祀る神社がある。</p> <p>古代山城は、敵軍の侵攻を監視し、妨害するために古代の官道を見張りやすい位置に築かれたとされており、御所ヶ谷神籠石北麓にも大宰府と京都平野をつなぐ古代官道が東西に走り抜けている。福岡県の瀬戸内海沿岸の古代山城はこの他、築上郡上毛町の唐原山城などが存在している。</p> <p>（参照：行橋市 HP）</p> 
<p>臼杵石仏 （大分県臼杵市）</p>	<p>古園石仏大日如来像に代表される臼杵石仏（磨崖仏）は、平安時代後期から鎌倉時代にかけて彫刻されたと言われており、その規模と、数量において、また彫刻の質の高さにおいて、わが国を代表する石仏群であることから、平成7年（1995年）6月15日には磨崖仏では全国初、彫刻としても九州初の国宝に指定された。</p> <p>その数は、60余体にもおよび、このうち59体が国宝となった。石仏群は4群に分かれ、地名によって、ホキ石仏第1群（堂ヶ迫石仏）、同第2群、山王山石仏、古園石仏と名づけられており、それぞれに、傑作秀作ぞろいであり、表情豊かな御仏の姿は、見る者の心にやすらぎをあたえてくれる。（参照：臼杵市 HP）</p>   <p style="text-align: center;">ホキ石仏                      古園石仏</p>

名 称	特 徴
<p>熊野磨崖仏 (大分県豊後高田市)</p>	<p>鬼が一夜で築いたという伝説のある自然石の乱積みの険しい石段を登ると、岩壁に不動明王（8 m）と大日如来（6 m）が刻まれている。不動明王はどこか微笑んだような姿で、引き締まった表情の大日如来とともに、その神秘的な姿でやさしく出迎えてくれる。</p> <p>これらは平安時代末期の作といわれており、国の史跡及び重要文化財に指定されており、鬱蒼とした山中にこれほど巨大なものを刻んだことは、当時の信仰の強さを物語っている。豊後磨崖仏の代表的なもので、日本最大級のスケールであり、約 10 年に一度行なわれる六郷満山の伝統行事である峯入りの荒行は、この不動明王の前を出発点とし、護摩を焚いて行程 150 km、約 10 日間の行に入る。</p> <p>(参照：豊後高田市 HP)</p> <div data-bbox="986 387 1422 936" data-label="Image"> </div> <p>熊野磨崖仏（不動明王）</p>
<p>石橋群 (大分県内)</p>	<p>日本の石橋は、その多くが江戸時代から大正時代までに造られた。著名な石橋研究家である故山口祐造氏の『石橋は生きている』（葦書房発行）では、平成 4 年時点で、日本に残っている石橋は 1,300 基以上、うち約 1,200 基、実に 90%以上は九州にあったことが示されている。なかでも、大分、熊本の両県は、367 基、330 基と特に多く、合計で九州全体の半数以上を占めている。</p> <p>石橋を造る技術は、江戸時代に中国から沖縄・長崎へ伝わったといわれており、大陸から九州へ伝わったという点では、弥生時代の稲作や鉄などと同様であるが、稲作や鉄が伝来後、全国へと広まっていったのに対し、石橋の技術は、ほとんど九州のみで発達したようである。</p> <p>(参照：農林水産省九州農政局 HP、九州の風土と石橋文化)</p> <p>大分県、熊本県、鹿児島県には多くの石造りの橋が残されているが、大分県で石橋が多く造られている宇佐市院内町周辺では、細かな川や深い谷が多く、大雨による橋の流出を防ぐ必要があり、橋が無ければ近隣との交流ができないなどの地理的な要因と、阿蘇山の噴火で形成された溶結凝灰岩が多く産出したこと、石工が多く存在していたことから、多くの石橋が作られたといわれている。(参照：宇佐市 HP)</p> <div data-bbox="699 1668 1286 1995" data-label="Image"> </div> <p>日本最長の石橋（耶馬溪橋、大分県中津市）</p>

名 称	特 徴
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>鳥居橋 (大分県宇佐市)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>一の橋 (大分県宇佐市)</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>御沓橋 (大分県宇佐市)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>念仏橋 (大分県宇佐市)</p> </div> </div>
<p>不老橋 (和歌山県和歌山市)</p>	<p>不老橋は、片男波松原にあった東照宮御旅所の移築に際して紀州藩 10 代藩主であった徳川治宝（橋が架けられた当時は 13 代藩主徳川慶福の治世中）の命により、嘉永 3 年（1850 年）に着工し、翌 4 年（1851 年）に完成したアーチ型の石橋である。この橋は、徳川家康を祀る東照宮の祭礼である和歌祭の時に、徳川家や東照宮関係の人々が新御旅所に向かうために通行した「お成り道」に架けられたものである。</p> <p>橋台のアーチ部分については肥後熊本の石工集団の施工であり、勾欄部分については湯浅の石工石屋忠兵衛の製作と推定されている。勾欄部分には、雲を文様化したレリーフがみられる。</p> <p>江戸時代のアーチ型石橋は、九州地方以外では大変珍しく、特に勾欄部分の彫刻が優れている。</p> <p>不老橋は、平成 7 年（1995 年）に和歌山市指定文化財建造物に指定されている。</p> <p>（参照：和歌山市観光協会 HP）</p> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">  </div>

名 称	特 徴
砲台跡 (兵庫県他)	<p data-bbox="523 237 1452 427">江戸末期には開国に向けて、海外から多くの船が日本に来るようになり、沿岸部の防衛を行うため、江戸幕府は瀬戸内海の和田岬、川崎(湊川)、西宮、今津(いずれも兵庫県)に砲台を設置した。砲台の外部は、花崗岩、内部は木材で2階建ての構造で作られている。現在、当時の状況で保存されているのは、和田岬砲台(兵庫県史跡)となっている。</p> <div data-bbox="703 450 1209 855" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="778 869 1134 902">和田岬砲台(兵庫県神戸市)</p> <p data-bbox="523 938 1452 1128">明治維新の後、明治政府は外国人から軍制の指導を受け、新たな砲台づくりを進めた。建設場所は、東京湾、対馬、下関、由良で、日清戦争を契機に、広島湾、芸予、佐世保、舞鶴、長崎、函館要塞の建設が進んだ。強固な構造を保つために、瀬戸内海で建造された要塞(砲台、兵舎、弾薬庫など)には、花崗岩が多く用いられている。</p> <div data-bbox="523 1140 994 1447" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1019 1140 1437 1447" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="807 1458 1214 1491">芸予要塞砲台跡(愛媛県今治市)</p> <div data-bbox="523 1509 994 1839" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1002 1509 1458 1839" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="807 1850 1214 1883">三高山砲台跡(広島県江田島市)</p>

名 称	特 徴
	<p>和歌山市友ヶ島の一つ沖ノ島には、砲台跡が点在している。明治政府により「由良要塞」として整備され、第二次世界大戦までの間は、一般の人々が島に近づくことは許されなかった。現在も、レンガ造りの砲台跡や日本で8番目に出来た洋式灯台（明治5年竣工）が残り、戦前の様子が偲ばれる。</p> <p>(参照：和歌山県フォト博物館 HP)</p> 
<p>水軒(すいけん)堤防 (和歌山県和歌山市)</p>	<p>紀の川の南岸の西浜に築かれた南北約 1.0km に及ぶ江戸時代の堤防跡。明治及び昭和の文献資料により、紀州藩初代藩主徳川頼宣の命を受け、寛永年間（1624～1644年）に朝比奈段右衛門が工事を担当し、13年の歳月をかけ完成したものとされていたが、その後の道路拡張に伴う発掘調査により、18世紀後半の築造であったことが判明した。また、堤の北端部・南端部の確認調査により、堤防は海側に石堤、陸側に土堤を併せもつ非常に強固な構造体であり、高さは石堤が約4m、土堤が約5mで、基底部の幅は推定で24m以上にも及ぶことが考えられる。</p> <p>築造の背景として、堤防東部の地域が、古代以来の名勝である和歌の浦と一体となった「吹上」の地であり、藩主が遊覧したり別邸を築いたりした西浜の地であることから、防潮とともに景観保持の目的であった可能性も想定されている。なお、道路拡張時の発掘調査により確認された石堤は、上部の6段まで（全体で16段のうち）が、南海水軒線の水軒駅跡地の水軒公園に移築保存されている。</p> <p>昭和34年（1959年）和歌山県指定文化財史跡に指定されている。</p> <p>(参照：和歌山市の文化財 HP)</p> 

名 称	特 徴
<p>大多府（おおたふ） 漁港元禄防波堤 （岡山県備前市）</p>	<p>大多府島は、元禄 11 年（1698 年）に岡山藩によって港が置かれ、諸藩の参勤交代の寄港地として賑わった。</p> <p>大多府漁港に残る元禄防波堤は、現存する数少ない明治以前の港湾施設で、300 年以上経過した今もなお現役で活躍し、島の人々の生活に根付いた役割を果たしている。防波堤は、岡山藩の土木技術者・津田永忠の指揮のもと、石工河内屋治兵衛によるものと推定され、二段に石を組んだ直立式石積の構造に、優美な三次元曲面（かまぼこ型）を有し、合端（石と石の接合部の表側に近い部分）は密着して藩校として建造された閑谷学校の石塀と同様、頑丈で美しい外観を呈している。</p> <p>（参照：国土交通省 HP）</p> 
<p>保久良神社（灘の一つ火） （兵庫県神戸市）</p>	<p>社頭の石燈籠は「灘の一つ火」と呼ばれ、古くは眼下の海を往来する船の目印として、灯台の役目を果たしてきた。昔は毎夜、麓の村の人たち（北畑天王講）が牛乳ビンなどに油を入れて訪れ、輪番で火を絶やさぬよう守っていたそうである。</p> <p>（参照：神戸市 HP）</p> 

名 称	特 徴
鍋島灯台 (香川県坂出市)	<p>瀬戸大橋直下の与島に隣接する小さな無人島が鍋島であり、この島の頂に鍋島灯台がある。本灯台は、当時のイギリス商務省から推薦されたイギリス人技術者リチャード・ヘンリー・ブラントンにより建設されたもので明治5年(1872年)11月15日に完成している。明治期において、瀬戸内海には、外国人技師の指導で8基の洋式灯台が建設されたが、鍋島灯台は白御影石を使った石造り灯台であり、今なお現存し海の安全を守っている。また、鍋島灯台は文化遺産としても高い評価を受けており、経済産業省による「近代化産業遺産群」として認定されている。</p> <p>(参照：高松海上保安部HP)</p> <p>同時期に建設された石造の灯台として、江崎灯台(兵庫県淡路市)、釣島灯台(愛媛県松山市)、部埼灯台(福岡県北九州市)などがある。</p> <div data-bbox="651 871 1321 1384" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="831 1384 1090 1417">瀬戸大橋と鍋島灯台</p>

名 称	特 徴
採石場	<p data-bbox="523 237 1452 707">瀬戸内海における石垣作りは7世紀後半に朝鮮半島における百濟滅亡の時期から始まるといわれている。唐、新羅軍が日本に攻めてくることを想定し百濟の技術者により朝鮮式山城が築かれた時に、日本初の城の石垣が誕生した。その後、元寇の時期に鎌倉幕府は、博多湾沿岸に「石築地（いしつじ）」と呼ばれる石垣堤防を作らせた。本格的に城の石垣が作られ始めたのは安土桃山時代以降で、織田信長が滋賀県にいた石工職人の穴太衆（あのをしゅう）に安土城を作らせたことから支配地に石垣作りの城が作られ始めた。豊臣秀吉が築城し徳川家康が再興した大坂城の石垣が日本最大のものでされている。また、西日本の城に石垣が備わっているのに比べて、東日本の城には小規模の石垣が見られるに過ぎない。この石垣に用いられた石材は、ほとんどが花崗岩でできており、固くて丈夫なので、城の土台としての石垣に最適であった。</p> <div data-bbox="620 721 1295 1243" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="863 1245 1118 1279">現在の大阪城の石垣</p> <div data-bbox="596 1355 1326 1899" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="831 1910 1126 1944">大阪城最大の石（蛸石）</p>

名 称	特 徴
	<p>近代においても石材の用途は建築資材として活用されてきており、北木石は日本銀行本店、靖国神社鳥居、明治生命本社などに、国会議事堂の建設に倉橋島、黒髪島の石が使用されている。</p> <p>花崗岩は瀬戸内海沿岸各地から大量に入手でき、海路を利用して運ぶことができたので、陸域よりも島嶼部で盛んに採掘されてきた。主な採石場としては、兵庫県姫路市の男鹿島、西島、香川県の小豆島、豊島、与島、小与島、櫃石島、広島、岡山県の犬島、白石島、北木島、愛媛県の伯方島、大三島、大島、広島県の江田島、倉橋島、山口県の浮島、大津島、黒髪島などがある。</p> <div style="text-align: center;">  <p>兵庫県家島（男鹿島）の採石場</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>大島石採石場（愛媛県今治市）</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>北木島採石場（岡山県笠岡市）</p> </div> </div>





# 瀬戸内における塩の文化



## 瀬戸内における塩の文化

### 1. はじめに

瀬戸内海では、古代において海藻に海水をかけて濃縮し、灌水を作る藻塩づくりが始まったとされている。その後、遠浅の海岸を利用した塩田で塩づくりが行われるようになり、江戸時代には播磨国沿岸に出現した入浜式塩田は、急速に瀬戸内各地へと広がった。瀬戸内海各地で効率のよい塩づくりが盛んに行われ、十州塩というブランドで日本全国に流通した。十州塩とは、播磨、備前、備中、備後、安芸、周、防、長門、阿波、讃岐、伊予を指しており、19世紀初めに全国生産量の9割を占めるほどになった。この頃には、讃岐三白（砂糖、塩、綿）、防長三白（砂糖、塩、紙）、児島三白（イカナゴ、塩、綿）と称される地域の特産品として、塩が挙げられていた。製塩方法は、江戸時代から続いた入浜式から、1955年頃に流下式に代わり、設備が自動化され冬にも塩が作れるようになった。このように瀬戸内海では晴れの日が多い気候条件を利用して古くから塩が作られてきた。

その後、イオン交換膜法が開発され、1972年を境に流下式は完全に姿を消してしまった。現在も瀬戸内海においては海水から工業的に塩が製造されているが、国内の経済成長とともに工業用に塩が大量に必要とされたため海外から安価な塩が輸入された。塩の輸入量は国内生産量の7倍に達している。

### 2. 製塩法の歴史と文化

瀬戸内沿岸は、内海であるため四季を通じて海水の入手が容易であったことに加え、温暖少雨という気象条件に恵まれていたため、古来から製塩が盛んであり、数多くの製塩法が生み出されたところであった。

#### （海水素水法（海水直煮法））

これらの製塩法のうち、もっとも原始的なものが海水素水法（海水直煮法）と呼ばれるものである。土器に海水を汲み入れ、これを火にかけて水分を蒸発させて結晶塩を精製する方法であり、すでに縄文時代の晩期にはこの方法が行われていたことが確認されている。しかしこの方法では莫大な燃料を必要とした。

#### （藻塩法、塩田法）

そのため太陽光や風力、さらには海藻や砂などを利用して海水を濃縮し、この濃縮海水を煮詰めることで燃料の節約を図る方法が考えられていった。このうちホンダワラなどの海藻で濃縮海水を採集する方法を藻塩法、また砂を使用するものを塩田法（塩浜法）という。このうち藻塩法による製塩は、奈良時代中頃まで、瀬戸内海に限らず日本の沿岸各地で行われていたが、奈良時代からは次第に塩田法が一般的となっていた。

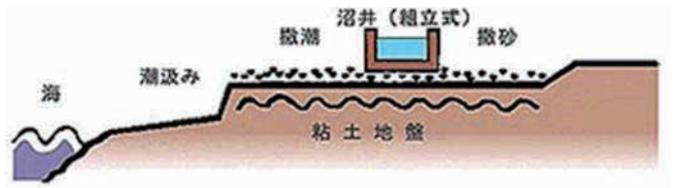


宮城県の御釜（おかま）神社では、毎年7月に「藻塩焼神事」（もしおやしんじ）が行われ、その製塩法を現在に伝えている。

御釜神社「藻塩焼神事」での"かん水"をとる様子

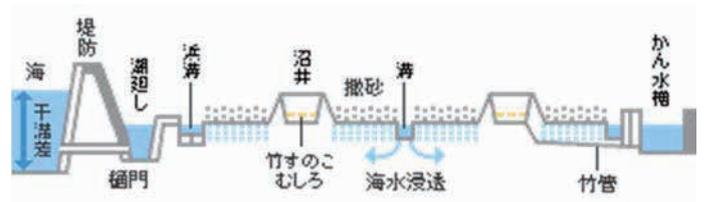
（揚浜系と入浜系）

塩田法は、塩田の造成位置から揚浜系と入浜系に分けられる。満潮水位より高い位置に塩田を造成するものを揚浜系という。これに対して入浜系とは干満潮の水位差を利用して、海水を塩田に導入するものをいう。この入浜系は揚浜系に比べて、労力の負担が少なくてすんだ。しかし近世以前の土木技術では、海水の圧力に耐えるだけの堤防を築造するのは難しく、そのため海水を自由にコントロールすることは出来なかった。このような入浜系のものを近世以降に出現した入浜塩田と区別して、古式入浜と呼んでいる。そのため中世の製塩業では、労力の負担は大きなものがあったが、生産力も高く、日常的に作業が可能であった揚浜塩田のほうが歓迎されたようである。このような揚浜塩田が、平安時代末期から鎌倉・室町期にかけて、瀬戸内の沿岸部や島嶼部のいたる所につくられた。



### (入浜塩田)

応仁の乱を契機に始まった戦国時代は科学技術が大きく前進した時代でもあった。鉄砲に代表される西洋の科学技術が取り入れられ、築城技術や築堤技術も大きく進歩していった。このような技術革新の結果、近代初頭になれば、海水の圧力に耐える堤防を構築することが可能となっていった。入浜塩田の出現時期は近世初頭、その出現場所は播磨国東部沿岸と考えられている。この地域は温暖少雨の気候に恵まれ、中世以来の製塩業の伝統を受け継ぐ地域であり、かつ同地域を流れる加古川・市川の河口付近には、上流から運ばれてきた土砂が堆積して、近世初期には広大なデルタ（砂州）が形成されていた。そのため簡単な堤防を築くだけで、塩田を造成することができた。さらに沖合遠くに堤防を築くことで、より広大な面積の塩田を造成することが可能になった。また、この地域は古代から採石された竜山石の産出地で、築堤に必要な石材が豊富なところであり、また「天下の名城」と称される姫路城を築き上げた大工・石工などの技術者集団が居住する地域でもあった。また大坂・京都に近接しているため、都市の形成・発展に伴う塩需要の増大にいち早く対応することもできた。



### (赤穂塩田)

この播磨国東部で培われた製塩技術を移植し、当初から入浜塩田を造成する目的で開発されたのが赤穂塩田であった。正保2年（1645年）、赤穂五万三千五百石の領主として入封した浅野長直は、千種川河口の沖合を埋め立てる大規模な塩田開発に着手し、この地に大塩・的形・荒井地方の塩業者の移住をすすめた。これが赤穂東浜塩田である。

### (入浜塩田の伝播)

17世紀中頃、播磨国沿岸に出現した入浜塩田は、急速に瀬戸内沿岸の各地へ広がっていったが、その最大の理由は収益の高さにあった。近世初期の入浜塩田では一軒前（五反九畝歩）で銀五百目～九百目の収益があった。これは同じ農地と比較して約10倍～20倍に相当する額であった。

### (関連産業の発展)

17世紀初頭に出現した入浜塩田は、17世紀中頃の赤穂塩田の完成を機に、その圧倒的な生産力で在来製塩（揚浜塩田・古式入浜）を駆逐していき、瀬戸内の各地へ普及していった。そして元禄期になれば、瀬戸内沿岸に約1500町歩が開発され、近世塩業の主流へと発展していった。この製塩業の隆盛は、関連する諸産業の発展を促すことにもなった。廻船業もその一つである。瀬戸内の塩の多くは、塩輸送を専門とする廻船業者に売却され、全国各地へと運ばれた。

### (休浜の提唱)

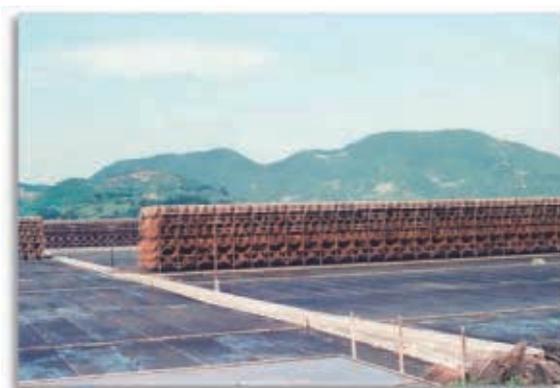
しかし順調に発展していた製塩業も、18世紀中頃になれば、相次ぐ塩田の開発で供給過剰となっていき、そのため塩価が下落して深刻な「塩田不況」に見舞われるようになった。この「塩田不況」を克服するため、瀬戸内西部の塩田を中心に導入されたのが、「休浜」とよばれる操業短縮・中止であった。

### (十州同盟の結成)

文化9年（1812年）、これまで休浜への参加を拒んでいた赤穂塩田をはじめ播磨の諸塩田が休浜同盟に参加することになった。そして播磨国に遅れること8年、文政3年（1820年）には阿波が、さらに天保3年（1832年）には備前が加盟、嘉永4年（1851年）には一時脱会していた伊予が再び参加、嘉永6年（1853年）には讃岐が加盟、明治9年（1876年）の高松集会において備中が参加、ここに十州休浜同盟が成立された。休浜同盟は、地主・自作・小作を含めた全生産者のカルテルとしての性格を持つようになり、明治38年（1905年）から実施された塩専売の積極的な推進団体として機能していった。

### (流下式塩田)

昭和の初め頃に平釜に変わって蒸気利用式塩釜・真空式蒸発缶が導入され、煮詰め工程に改革が起こった。さらに濃縮工程に流下式塩田が導入され、永年続いた入浜式塩田にとって変わった。流下式塩田とはかん水を採るための装置で、昭和27から34年にかけて入浜塩田から転換された方式である。地盤に傾斜を付け、その上に粘土またはビニールを敷き、さらに子砂利を敷いた流下盤と柱に竹の小枝を階段状に吊るした枝条架からなり、ポンプで海水を汲み揚げ、第一流下盤、第二流下盤・枝条架の順に流して、太陽光と風で水分を蒸発させる。これを何度も繰り返すことで、海水が濃縮される。この方法により年間を通して採かんが可能になり、入浜塩田のように砂を運ぶこともなく、労働力は大幅に軽減された。



(イオン交換膜製塩法)

昭和47年以降、従来の水分を蒸発・除去する方法から、海水中の塩分を集めるイオン交換膜製塩法が導入され、全面的にこの方法に切り替えられた。この方法は電気の利用して海水中の塩分を集める方法である。

(現在の塩事業)

1905年に施行されて以来92年間続いた塩専売法が廃止され、新たに塩事業法が施行された。現在は塩製造者が増え、様々な方法で塩づくりが行われている。

参照：「瀬戸内海の文化と環境」

公益財団法人塩事業センター（写真提供）

### 3. 瀬戸内海の子な塩の産地

(香川県)

降雨量の少ない同県では古くから製塩が盛んであり、弥生時代中期には土器製塩の技術が成立し、備讃瀬戸地域における塩づくりの中心となった。島嶼部や沿岸部の遺跡からは海水を煮詰めて塩を作る際に使ったと思われる製塩土器が多数出土している。

また、17世紀頃からの瀬戸内地域での塩田開発によって、江戸時代には讃岐、伊予、備前、備後、備中など瀬戸内十州塩田での塩の生産量は全国の80%を占め、砂糖・綿とともに「讃岐三白」と呼ばれていた。現在も製塩に関する施設は多い。

(徳島県)

鳴門地域における製塩の歴史は古く、5～6世紀頃の製塩遺跡が発掘されている。近世では、慶長4年(1599年)に藩主蜂須賀氏が播州荒井村(兵庫県)から技術者を招いて入浜式塩田を開いた。その後、藩の保護奨励により急速に塩田開発が進められ、製塩は江戸から明治、大正と、鳴門の一大産業となる。十州塩の生産地のひとつであり、阿波の塩田でとれる塩は、齊田塩(さいたじお)として全国に名声を博した。

製塩業の文化遺産として、「鳴門の製塩用具」が国の重要有形民俗文化財に指定されている。

(愛媛県)

降雨量の少ない同県では古くから製塩が盛んであった。弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての製塩遺跡が発掘され製塩土器が出土しているのを始めとして、中世においては塩の荘園として京都の東寺に塩を貢納していた弓削島荘、近代においては十州塩の一つに数えられ全国に塩を移出していた波止浜塩田などがある。

#### (大阪府)

温暖な気候であり穏やかな湾をもつ大阪では、古くから製塩が行われていた。大阪湾岸地域では古墳時代初期の製塩土器や遺構等が見つかっている。水上交通の要地であり、水上交通の発展に伴い近世においては「天下の台所」と呼ばれ、全国各地から米や産物が集まるようになった。塩に関しても生産地というより運び込まれた塩を全国各地に送る集積地・商業地としての性格を強くしていった。

#### (兵庫県)

兵庫県は温暖な瀬戸内気候と遠浅の海に恵まれ、古くから塩づくりが行なわれていた。播州荒井浜（高砂市）は、近世の瀬戸内において最も早く文献に現れる塩田のある地である。兵庫県には、「十州塩」の生産地のひとつである播磨があり、ここで取れた塩は大塩や赤穂塩と呼ばれていた。忠臣蔵で有名な、播州赤穂の領主浅野内匠頭が吉良上野介義央に切りかかった「松の廊下事件」の発端は、塩技術をめぐる浅野家と吉良家の確執にあったという説もある。

#### (岡山県)

瀬戸内海に面し、「晴れの国」（降水量 1mm 未満の日数が全国第 1 位）である同県は、その名の通り雨が少なく、温暖で製塩に向く気候と地形を持つ県である。製塩は弥生時代中期頃に始まり盛んに行われていた。瀬戸内で最古の製塩土器も出土している。1800 年代には塩田王と呼ばれた野崎武左衛門により、大規模な塩田事業が起こり、瀬戸内海沿岸地域の十州塩に名を連ねた。

#### (広島県)

広島県では江戸時代、塩分が強く耕作に向かない干拓地であった竹原地区の土壌を利用した製塩業が始まり、播州赤穂から導入した入浜式の製塩技術をもとに発展していった。十州塩の生産地のひとつである。それらの塩は、「竹原塩」と呼ばれ日本中に出荷されるほどの成功を収め、町の繁栄とともに町人文化が栄えた。竹原市歴史民俗資料館では実際に使用されていた製塩用具や資料を見学することができる。

#### (山口県)

本州最西端に位置する同県は、古くは大陸文化の窓口として栄え、さまざまな遺跡が残されている。古墳時代から奈良時代にかけての製塩遺跡からは、美濃ヶ浜式土器と呼ばれる特徴的な製塩土器が出土している。近代にかけては、長門、周防において入浜式製塩が発展し、「十州塩」の生産地のひとつとなった。十州塩業組合を組織した秋良貞臣や、昭和年間に塩価の維持を実現させた田中藤六などの活躍が目覚しい。

#### (大分県)

大分県の塩田は、瀬戸内海沿岸地域の広大な干潟を干拓造成した入浜式塩田で、同地域の福岡県の塩田と合わせて、その塩田面積は九州全塩田の 3 分の 1 を占めていた。塩田は周防灘の「和田」「高家」「八幡」「和間」「姫島」等の他、「杵築」「大分」「佐伯」等に存在した。この内、別府湾の製塩の歴史は古く、別府湾岸の大分郡 笠和郷（大分市）では平安時代末か

ら 由原(ゆすはら)八幡宮に供えるための塩浜が開発されていた。のちに府内藩領となる萩原村、幕府領原村(大分市)が江戸初期からの塩浜として知られている。

また姫島では、慶長5年(16110年)から元和8年(1622年)に約9町8反の塩浜が開発され、島の半数(81軒)で製塩にたずさわることになった。

参照： 公益財団法人塩事業センターHP

### 府 県 別 塩 生 産 高

区 分	1892年 (明治25年)	1902年 (明治35年)	1912年 (明治45年 大正元年)	1922年 (大正11年)	1932年 (昭和7年)	1952年 (昭和27年)	1962年 (昭和37年)	1971年 (昭和46年)
単 位	石	→	斤	→	kg	→	→	→
大阪	----	----	84,170	116,000	645,600	----	----	----
兵庫	673,504	854,068	140,954,889	157,031,350	85,931,612	66,785,667	146,374,187	142,668,218
岡山	509,188	448,055	97,634,583	111,270,687	51,127,076	45,361,610	158,643,564	215,710,056
広島	761,466	864,071	99,353,302	109,525,385	48,472,801	37,444,036	31,315,584	8,952,382
山口	994,150	835,191	174,056,764	182,449,686	84,693,233	52,242,228	10,954,080	8,793,390
徳島	411,456	449,578	94,873,940	95,801,184	48,230,508	42,628,191	76,061,180	114,666,465
香川	838,459	1,052,851	265,970,816	280,558,229	177,237,925	148,401,485	272,162,024	214,725,333
愛媛	386,598	311,919	62,948,499	63,266,443	35,859,151	29,511,976	19,710,000	13,234,171
大分	143,328	171,558	19,185,902	27,993,246	12,194,901	9,043,451	----	----
大阪から大分までの計	4,718,149	4,987,291	954,978,695	1,027,896,210	543,747,207	431,418,644	715,220,619	718,750,015
全国計	4,718,149	4,987,291	955,062,865	1,028,012,210	544,392,807	431,418,644	715,220,619	718,750,015

出典： 農商務統計表 第8～22次(農商務省編：慶応書房刊)  
 塩専売事業年報(大蔵省主税局編)、塩専売統計表(専売局編)  
 専売統計年報(専売局編、日本専売公社編)  
 塩業整備報告第2巻(日本専売公社 1966年刊)  
 注： 1942年(昭和17年)はデータなし

#### 4. 瀬戸内地方の塩業と流通、食文化

(塩は神に祀られない)

現在、塩といえば醤油や味噌などの発酵調味料などの原料、漬け物などの保存、調理での味付けぐらいしか思いうかばない。塩の食味への関心では、瀬戸内島嶼部で再現した藻塩や海外から輸入する岩塩のことを聞くぐらいである。葬儀に参列したときに渡される「清めの塩」で、塩の「浄め」の働きを思いだすぐらいである。塩は生きていくうえで不可欠だが、食用塩は工場生産になり、工業用は外国からの輸入でさらに意識から遠のいた。

日本人が塩への関心が薄いことについて、日本塩業研究会の会長だった渋沢敬三が語った内容を、宮本常一は『塩の道』で以下のように紹介している。

塩は私たちの食べもののなかの一つの要素にはなっているが、塩そのものはエネルギーにならない。塩は体内の循環の機能をたすけ、健康を保全する働きがある。考えてみると、エネルギーを生む食物は、霊が宿っているため神に祀られる。米、麦、粟などは、それぞれ穀霊がやどる。塩は霊がないので神に祀られないことが、私たち日本人の塩にする姿勢だといえる。

(瀬戸内地方は日本の塩業の中心地)

瀬戸内地方では弥生時代中期に備讃瀬戸で土器製塩がはじまる。瀬戸内地方は温暖少雨で、澄んだ海水と白砂青松の海岸は塩づくりに適していた。さらに古来から波穏やかな瀬戸内海は主要航路として発達し、塩を運ぶための海上交通にも恵まれていた。

製塩技術は、土器製塩から揚浜式製塩、入浜式製塩へと進化した。江戸時代初期に赤穂塩田ではじまった入浜式塩田は各藩の奨励もあり竹原から松永、向島など瀬戸内沿岸に広がった。江戸時代中期には塩が生産過剰になるほどで、効率が悪い冬季は作業を休む休浜制度をとる塩田が次第に拡大していった。それでも江戸時代末には全国の8割をしめるまでになっていた。

(海上交通による販路の拡大)

瀬戸内地方の塩は、1670年代の西廻り航路の開発などを契機として日本海側に運ばれるようになった。日本海と瀬戸内海を行き来した廻船は、日本海側からニシン・昆布などの海産物や米などを積んできて、帰り荷には塩・木綿などを運んでいった。さらに備前の塩廻船が江戸での販売に成功するなどして、瀬戸内地方の塩は全国の市場へと拡大した。そうしたなか販路の固定化も進み、赤穂・撫養・坂出は大阪・東海・関東へ、竹原・生口島・波止浜は北陸・東北へ、三田尻・平生などは山陰方面で販売されるようになった。

全国生産高の大半をしめた瀬戸内地方の塩は海上交通で運ばれ、安定した供給により地域を潤すだけでなく新たな産業や食文化をうみだした。



### (調味料の新開発)

瀬戸内地方で、酒や醤油などの醸造業が発達し、湯浅醤油、龍野の薄口醤油、小豆島の濃口醤油、柳井の甘露醤油といった特色ある醤油を造りだした。瀬戸内地方の豊富な原料を海上輸送で入手でき、大坂や京都などの販路も近かった。

現在の小麦と大豆、塩を主原料とする醤油は、中国からの帰国僧覚心がもち帰った怪山寺味噌の上澄み液などを改良してはじまった。天正年間(1578~1602)のことで、和歌山県の湯浅町特産の醤油産業のはじまりである。

覚心は、姫路でも醤油の指導にあたり、龍野ではたまり醤油をつたえた。たまり醤油の原料などを工夫して改良したのが龍野の薄口醤油である。小麦の炒り方を少なくして、酒などを加えたという。

小豆島での醤油業のはじまりは、寛政年間(1789~1801)と遅かった。原料の讃岐平野の小麦、伯方の塩、九州の大豆などを海上輸送でき、大坂など販路も近かった。野田・銚子とともに日本三大濃口醤油の産地となった。



淡口・濃口・再仕込の仕込法  
(小豆島醤油共同組合 HP)

柳井市の甘露醤油は、天明年間(1781~1789)にできた。再仕込み醤油といわれるのは、仕込のとき塩水のかわりに、非加熱処理した生醤油をくわえるため、どろっとした甘みの強い醤油になった。

さらに、その由来は明確ではないが、香川県沿岸部の漁家では戦後までイカナゴ醤油を自家製していた。イカナゴがたくさんとれる春先に、塩とイカナゴを桶に漬け込み、イカナゴが発酵してドロドロになると、濾過して調味料として使った。秋田県のショツツル、石川県のイシリと並び、日本の三魚醬として知られていた。

### (日本海に運ばれた塩と海産物の流通)

江戸時代は、新潟県の糸魚川から千国街道を經由して、内陸の長野県松本まで塩や干魚、塩魚を送っていた。安政5年(1857)に、糸魚川から信州に送られた塩は約70万駄、魚類は142万駄だった。牛の背に荷物をつけて、雪がない4月から10月にかけて運んだ。塩は、地元の地塩はわずかで、加州塩(金沢)と竹原塩(広島)の他国塩が大半だった。

海がない長野県でも、年越しだけは生に近い魚を年取魚として神棚に供えから食べた。現在は、松本で年取魚といえばブリ・サケ・マスなど多様だが、古くは年取魚はブリに決まっていた。ブリは、年越し前に日本海を南下して富山湾にくると、成長にあわせて名称が変わる出世魚で縁起がよかったからである。能登ブリ、氷見ブリ、魚津ブリを糸魚川に集め、腸わたを抜いて腐敗防止のため塩を振った生ブリが年取魚と決まっていた。生ブリより長期保存するため、塩漬けにした塩ブリもあった。竹籠に5、6本ブリを入れると10~15貫で、ボッカが背負って運んだ。

胡桃沢勘司氏は、松本地方の年取魚のブリは宝暦年間(1751~1764)頃に、ある程度浸透していた。宝暦年間は瀬戸内地方の塩が過剰生産になり、不況から脱出するために休浜法が提唱されたところである。

沿岸から内陸部へ送られる干魚や塩魚は、地域の交通史や儀礼食の範囲のなかでとらえてきた。日本の塩業の中心だった瀬戸内地方の塩業を理解するためには、日本全体の海上交通と内陸交通をつなぎ、海辺と内陸の魚食文化を比較しながら総合的に考える必要があるであろう。

## 5. 瀬戸内海の塩に係る名所・史跡

### (喜兵衛島製塩遺跡(香川県直島町))

土器製塩の事実が日本で初めて立証された製塩遺跡。海浜に面する平坦地のほぼ中央部に製塩炉があり、その周囲に堅くしまった作業面、その外周に使用済みの製塩土器、灰、炭などの捨て場という構成になっている。



### (沙弥ナカンダ浜遺跡 (香川県坂出市))

海浜遺構の多くが消滅していくなかで、縄文時代から弥生時代を経て古墳時代にいたる遺跡が良好に保たれていることなどから、香川県指定史跡に指定されている。製塩遺構も発見されている。



### (福永家住宅 (徳島県鳴門市))

200年ほど前の塩田主の屋敷跡。国の重要文化財に指定されている。

福永家は享保10年(1725年)から製塩業を始め、以後8代に渡って鳴門の製塩を支えた。

今も残る屋敷跡は、居住区である主屋を中心に、その周りに製塩施設(薪納屋、石炭置場、かん水を煮つめる萱葺の釜屋、かん水だめ、塩納屋など)がある特徴的な屋敷構えをしている。



(弓削島荘 (愛媛県上島町))

愛媛県の北東部に位置する弓削島にあった荘園。中世の時代には、東寺(京都府)の荘園であった。沿岸部での製塩が盛んで、生産された塩は船で京都の荘園領主のもとへと運ばれ、塩の荘園として知られていた。東寺文書には弓削島の製塩の史料が多く残されている。



(讃良郡条理遺跡 (大阪府四条畷市))

古墳時代の遺構。製塩土器や馬具などが見ついている。古代の牧場であったと見られ、製塩土器は馬の飼育に不可欠な多量の塩を確保するために使われていたと考えられている。

(旧日本専売公社赤穂支局(兵庫県赤穂市))

旧日本専売公社赤穂支局は塩務局の庁舎として明治41年(1908年)に建てられたもので、木造2階建、屋根は切妻(一部宝形)、棧瓦葺、丸窓、縦長の上げ下げ窓、アーチ状庇、ファンライト、下見板張り、ギリシャ神殿風柱など当時の洋風建築の要素を取り入れている。昭和57年(1982年)以降は赤穂市立民俗資料館として一般公開されている。明治時代後期に建てられた洋風塩務局庁舎の遺構として貴重なことから昭和61年(1986年)に兵庫県指定文化財に指定されている。



参照：赤穂市観光ナビ

(旧入江家住宅 (兵庫県高砂市))

高砂市曾根町にある、230年前の塩田主の屋敷。兵庫県指定重要有形文化財に指定されている。曾根地区は、海岸部に入浜式塩田が広がっており、姫路市大塩と並ぶ、「十洲塩」の生産地であった。入江家は江戸時代前期から塩田を営み、曾根村の庄屋をつとめるなど、地域経済・文化の中心を担ってきた。



参照：高砂市教育委員会

(堂山遺跡 (兵庫県赤穂市))

東西を山に囲まれた小規模な入江状の地形で、山麓からの緩やかな傾斜地に立地する。遺跡の眼前には、かつては海が入り込み、遠浅の干潟を形成していたと推定される。

遺跡からは、弥生時代末から古墳時代初頭、古墳時代中期・後期、飛鳥・奈良時代の各時期の製塩土器が出土しており、当地域の土器製塩の開始と変遷が明らかとなった。さらに、平安時代末から鎌倉時代初頭の塩田地盤・採鹹土坑（沼井）などの遺構が検出されており、揚浜系汲潮浜の塩田遺構として注目されている。

参照：赤穂市教育委員会

(師楽遺跡 (岡山県瀬戸内市))

錦海湾の南東部、標高 2 m 前後の集落内に位置し、弥生時代から 7 世紀頃まで人々が生活していた遺跡である。

昭和 4 年頃発掘調査が行われた時に多量の土器が出土した。後の調査などによりこれらの土器片が塩づくりに使用されていたことが判明した。このことから製塩土器が「師楽式土器」と呼ばれる元となった。古墳時代後期の製塩土器が最も多く、弥生時代から古墳時代の製塩土器も採取されている。

参照：牛窓町史資料編Ⅱ



師楽遺跡出土製塩土器

(旧専売局味野収納所山田出張所 (岡山県玉野市))

約 100 年前に建築された旧大蔵省の旧専売局味野収納所山田出張所とその文書庫。塩専売時代の庁舎と文書庫がそろって現存する例は珍しい。現在は、市が所有する施設となっており、地元有志による保存運動が行われ、平成 23 年 (2011 年) 10 月に国の登録有形文化財に登録されている。

参照：玉野市

(鹿沼塩田跡 (岡山県瀬戸内市))

鹿忍村の塩田の記録の最初は、「撮要録」の宝永六年 (1709 年) に釜屋件数が記載されている。かなりの規模を誇っていたようで明暦・万治年間 (1655 年～60 年) の「邑久郡図」の鹿忍村に広大な塩田が描かれている。品質も優れ「備陽記」の「備前国より出る名物の事」の中に、鹿忍塩を加え優れていることが紹介されている。

大正 15 年、株式会社に組織され、蒸気を利用した近代的な製塩方法がとられたが、昭和 34 年に廃止された。

参照：牛窓町史通史編



(錦海塩田跡 (岡山県瀬戸内市))

昭和 31 年 (1956 年) から錦海湾塩田化事業が始まった。昭和 34 年から約 500 ヘクタールの敷地内で流下式による製塩事業を開始した。

昭和 46 年 (1971 年) からはイオン交換膜法に変更され年間 15 万トンを生産したが、枝条架は不要となり広大な塩田部分が遊休地となり、平成 14 年製塩業は廃止された。

現在塩田跡地を利用して平成 31 年運転開始に向けて、太陽光発電設備が建設されている。  
参照：牛窓町史通史編



(かまがり古代製塩遺跡復元展示館 (広島県呉市蒲刈町))

古代土器製塩遺跡を発掘したままの状態で見学できるように復元し、ドームで被った展示館。



(波雁ヶ浜 (はかりがはま) 遺跡 (山口県宇部市))

古墳時代から奈良時代にかけて営まれた製塩遺跡。短い棒状の脚部の上に碗形の容器がつくワイングラスのような形をした美濃ヶ浜式土器と呼ばれる製塩土器が多量に出土している。



写真は復元品、宇部市所蔵

(三田尻浜大会所跡 (山口県防府市))

近世における塩業の発展に伴い、塩業に関わるものは製塩者以外にも多数に及んだ。これらの浜人・浜子・商人・職人・船乗りなどを統括する機関として、各塩浜ごとに塩田会所が設けられていた。

塩田会所には浜主から選ばれた浜掛り役人が勤め、石炭改めや塩廻し、日雇い頭などの役職があり、塩業全般における事柄を処理していた。

防長浜を代表する三田尻浜には明和8年(1771年)に三田尻浜大会所が設けられ、特別に大年寄役座がおかれた。大年寄は休浜方規定の取り締まりや、塩田の営業上の取り決め、塩の販売統制など、営業停止処分や罰金刑を課すほどの権限を持って塩業全般を統括していた。初代の大年寄役座は\*三八替持法を案出した田中藤六である。

\*「三八替持法」(さんぱちかえもちほう) 1年のうちで、塩がつくりやすい3月から8月だけ、塩田を半分ずつ交互に使って塩をつくるという方法。

参照： 公益財団法人塩事業センターHP



(由宇町神東(ゆうまちしんとう) 城ヶ崎  
(山口県岩国市))

山陽本線神代駅のほぼ北北東1000mの丘陵地の畑を柑橘園にするため深く掘り下げたところ、石囲みの中から瀬戸内海海浜遺跡に多く分布する製塩土器いわゆる「師楽式土器」の棒状脚が発見された。

古代塩生産用具として、製塩の煎熬過程に使用された煎熬用煮沸容器の底部についていた脚だけがたまたま蒐集された。

参照： 由宇町史





瀬戸内海の塩に係る名所・史跡

## 6. 瀬戸内海の塩に係る資料館など

(香川県立ミュージアム (香川県高松市))

「塩」抜きには語れない香川の歴史を、時代をおって学ぶことが出来、そのなかで塩づくりや流通についても紹介されている。現在に至るまでの塩づくりの変遷がコンパクトにわかりやすく映像化されているビデオライブラリーはみどころのひとつ。

(坂出市塩業資料館 (香川県坂出市))

古くから塩の産地として栄えた香川の現在に至るまでの製塩の歴史が詳しく解説されている。土器製塩から入浜式塩田まで、塩づくりがどのように行われていたかを、実際の道具や模型、写真、映像から学ぶことができる。



(うたづ海ホテル (香川県宇多津町))

塩田跡地に建てられた館内では、最新映像で塩づくりの作業や宇多津町の歴史を紹介している。瀬戸内海に面した位置には入浜式塩田が復元されており、希望者は製塩体験を行うことができる。(要予約)



(ソルティ多喜浜 (愛媛県新居浜市))

全国でも珍しい小学校に併設された製塩施設。流下式のミニ塩田として、枝条架が2架、下盤が1ヶ所設けられ、沖合からくみ上げた海水を濃縮させ、かん水(濃い塩水)を作り出す製塩の仕組みを説明している。平成17年(2005年)に、多喜浜塩田開発300年を記念して、新居浜市教育委員会の『夢広がる学校づくり』事業の一環として地域の人々の支援により建設された。



(赤穂市立海洋科学館・塩の国 (兵庫県赤穂市))

赤穂海浜公園の敷地内にある塩や海についての科学館。公園内に揚浜式塩田、入浜式塩田、流下式塩田を復元し、塩づくりの歴史が見えるように工夫して展示されている。また、隣接する塩の国では、かん水を煮詰めて塩を作る体験棟がある。



(赤穂市立歴史博物館 (兵庫県赤穂市))

正面から見ると近代的な現代建築。裏手から見ると白壁の土蔵造り。そんな不思議な外観をもった赤穂市立歴史博物館は「塩」と「赤穂義士」をメインテーマとし、「塩と義士の館」を愛称に持つ赤穂ならではの博物館である。展示品には国指定重要有形民俗文化財である「赤穂の製塩用具」もある。



(野崎家塩業歴史館 (岡山県倉敷市))

江戸時代に塩田を開発し、現在も塩をつくり続けている野崎家の旧宅。3000坪の敷地すべてが岡山県の史跡に指定されている。

敷地内にある蔵のひとつが塩業資料の展示館になっており、塩づくりについても学べるほか、近世後期の建築技術の粋を集めた建物もみどころ。予約をすれば、塩づくり体験も可能。



(竹原市歴史民俗資料館 (広島県竹原市))

慶安3年(1650年)に赤穂の入浜式製塩の技術を移入してからの310年間、塩の町として知られていた竹原で実際に使われていた製塩用具を展示している。



(三田尻塩田記念産業公園 (山口県防府市))

江戸時代中期から昭和 30 年代まで約 260 年間にわたって、全国有数の塩の産地として栄えた防府の塩田跡地の一角にある公園。入浜式塩田の諸施設を復元し、製塩道具等の展示や塩づくりの様子を紹介している。予約をすれば、塩づくり体験が可能。年に一度塩田まつりも行われている。



参照： 公益財団法人塩事業センターHP



瀬戸内海の塩に係る資料館など

## 7. 瀬戸内海の塩に係る行事

(さかいで塩まつり (香川県坂出市))

塩田のまちとして発展してきた坂出市で、年に一度開催されている坂出青年会議所と地域の団体とによって構成される「塩まつり実行委員会」主催の地域に根ざしたイベント。坂出塩田の開発者であり、「塩田の父」として語り継がれている江戸時代の発明家久米通賢の功績を称え、塩田のまちの魅力をアピールするため、平成4年(1992年)よりスタートした。メガ塩すべり台を中心に様々な催し物、模擬店、フリーマーケット等が行われている。



(塩田まつり (山口県防府市))

入浜式塩田の諸施設を復元した三田尻塩田記念産業公園で年に一度開催されている。当日は公園を無料開放し、塩の釜たき実演や塩づくり体験など、塩づくりについての理解を深めることができるイベントを行う。



参照 公益財団法人塩事業センター HP



瀬戸内海の塩に係る行事

## <参考>

### 【海文化委員名簿】

京都府環境部環境管理課

兵庫県農政環境部環境管理局水大気課

和歌山県環境生活部環境政策局環境管理課

岡山県環境文化部環境管理課

広島県環境県民局環境部環境保全課

香川県環境森林部環境管理課

愛媛県県民環境部環境局環境政策課

兵庫県漁業協同組合連合会組織統括本部指導部

山口県漁業協同組合総務指導部指導課

一般財団法人広島県環境保健協会地域活動支援センター

### 【有識者】

国立研究開発法人水産・教育機構 理事 鷺尾 圭司

### 【協力者】

石の運搬・塩の運搬等については愛知大学教授 印南敏秀氏から原稿を頂いた。

瀬戸内における水環境を基調とする海文化  
瀬戸内の石の文化・塩の文化

平成 29 年 9 月発行

発行・編集 公益社団法人瀬戸内海環境保全協会  
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1 丁目 5 番 2 号  
人と防災未来センター東館 5 階  
電話 078-241-7720 FAX078-241-7730  
<http://www.seto.or.jp/setokyo/>

